

イネ科植物図説 II

(生活体の特徴を基礎とした)

藤 本 義 昭

メリケンカルカヤ *Andropogon virginicus* L. Fig. 14

高さ 80~120cm, 根生葉は茎を抱きゆるく叢生する多年生草本、穂は20~30cm, 小穂は一見カルカヤに似る。総は2~4個、稈及びその各節より生じたる側枝に頂生、基部は葉鞘のみに退化せる苞に包まれる。花軸は繊細、第一小穂は殆ど小穂のみに退化す。総の節

間及び小穂は長毛あり、総苞上、小穂は2条に分れる。花頭は小さく、内外穎両側に長軟毛のむち状束(5~7mm)を二個具う。芒は10~13mm, 内外穎共先端部に細鋸歯を具え剛毛あり、種子は幅0.2mm, 長さ1mm, 両端尖る。基部より1/3の所に横溝あり、淡灰綠色、色帯葉基なく、小舌は革質、1mm, 截型、



Fig. 14

稀に不規則な歯状を呈す。上縁部は纖毛を密生、小舌両側葉基部より長軟毛を束生、葉鞘は開き縁辺部は厚膜質、軟毛を生ず。断面は扁圧された円形、葉身は幅3~5mm、長さ15~25cm漸尖、中程より先下垂す。断面V型、葉表の鞘口部は凹み軟毛を多發生す、節は褐紫色を帯ぶ。

本種は北米中央部以東原産で我が国では大井次三郎氏が山城国綴喜郡大住村虚宝蔵山にて、実村正巳氏が採集された標品及び、中国地方にて田代善太郎氏が採集された標品を研究された。又久内清孝氏によると埼玉県に於ても採集されている。筆者は室井紳氏より播磨国加東郡小野町附近にて採集された標品をいただき、又1952年10月26日に播磨国加西郡下里村にて本品を得たものである。室井氏によると加西郡北条町、加東郡小野町、美養郡三木町辺のバス沿線一带の広大地域にわたりイモ畑の荒廢地の谷に生えた様に行儀よく繁茂しているということである。(加西郡下里村産)

I, 植物体、II, 小舌部正面、III, 小舌部側面、IV, 葉鞘部断面、V, 側枝図、VI, 小穂圖、VII, 花の側面、VIII, 種子、

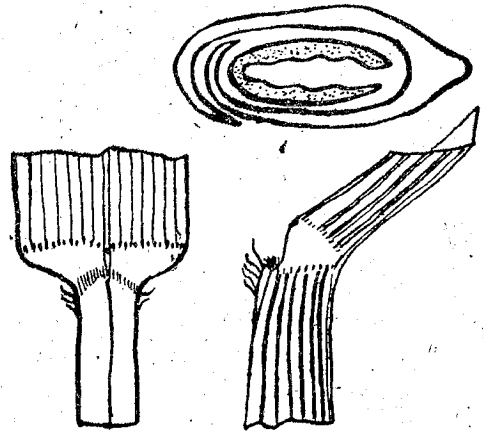
Cenchrus tribioides L. Fig. 15

1年生、稈はやや扁圧された円形、高さ30cm内外、基部にて分枝し紫色を帯び地上部の節より不定根を發す。穂は長さ5~10cm、小穂は2花、基部の上にて合着せる2個の総苞片より成る穂果に包まれ、2花共に熟す。穂果は広卵形で、横徑5mm、縦徑8mm、全体に棘を生じ、刺上に微細道刺あり、全体に綿毛を布く、刺は紫色を帯ぶ。外穎は5脈、内穎は3脈、穎の先端は曲る。種子は1mm、上端突出せる球形。色帯は明瞭で背部は狭く、縁辺部に軟毛を疎生す。葉基なく、小舌は長軟毛となり密に生ず。長さ1.5~2mm、両縁基部は硝子状薄膜となり縁鞘に続く、葉身は幅5~7mm、長さ8~10cm 断面V型、葉鞘は開き莖を抱く、葉鞘特に節に近い部分程紅紫色を帯ぶ。鞘口部に軟毛を疎生、縁辺は硝子状薄膜、断面は扁圧された長楕円形。

本種は室井紳氏により1952年9月6日神戸税関で採集されたものである。これより先に矢張り神戸税関で宇野確雄氏により *C. pauciflorus* Bentham が採集されているが、これは鞘口部無毛又は色帯部縁辺に纖毛を疎生し、小舌は0.6~0.8mm、縁辺に毛を生ず。葉身は2~7mm、長さ6~15cm、断面はV型、又穂果は基部尖る。併し今は絶滅している。

この外本邦には *C. eihintii* L. があり、これに対してクリノイガと命名されているが未だ筆者は見えない。又同属の *C. calyculatus* Cavanilles トケシバが琉球にあるが、これは熱帯産である。これに反し

C. tribioides, *C. paneiflorus*, *C. echinatus* は北米原産のものである。特に *C. tribioides*, は北米東部海岸の諸州及び西印度諸島の砂地に多い。



CENCHRUS PAUCIFLORUS

Fig. 16

次に *Cenchrus* の検索を Hitchcock の Manual glass of the U. S. A. より引用すると。

- A₁ 総苞の裂片は基底のみで合し、小穂は密、多年生
草本……………*C. myosuioide*
- A₂ 総苞の裂片は基底の上にて合している。B₁ 総苞の基底は剛毛がゆるく輪状に生ず。
1年生草本
 - C₁ 刺芒は剛毛なく4mmより短かく多数あり、小穂に密につく、裂片は裂けて刺針を作らず……………*C. brownii*
 - C₂ 刺芒は5~7mmにして剛毛なく疎、総苞の裂片は殆ど、又は全く1~2が軽く合着して先は刺針となる……………*C. echinatus*
- B₂ 総苞は広く拡つた針となり基底に剛毛の輪なし。
 - C₁ 穂果は鋸歯ある卵形、通常3.5mmより短かく基部は尖る。多年生草本。
 - D₁ 刺芒は無毛、針は4~6mm……………*C. glatillimus*
 - D₂ 刺芒は有毛、針は4mm、稀に長い……………*C. incertus*
 - C₂ 穂果は円形、5mmより多少長く基部は尖らず、1年生。
 - D₁ 刺芒は針を含み7~8mm、明らかに軟毛あり……………*C. pauciflorus*
 - D₂ 刺芒は針を含み10~15mm、密に綿毛を布く……………*C. tribioides*

(摂津国神戸税関産)

I, 植物体 II, 小舌部正面 III, 小舌部側面 IV, 小穂側面 V, 小穂正面 VI, 花(成熟した)の苞の

ついた図 VII, 苞をはづした側面 VIII, 苞をはづした正面 IX, 種子正面 X, 種子背面 XI, 葉鞘断面

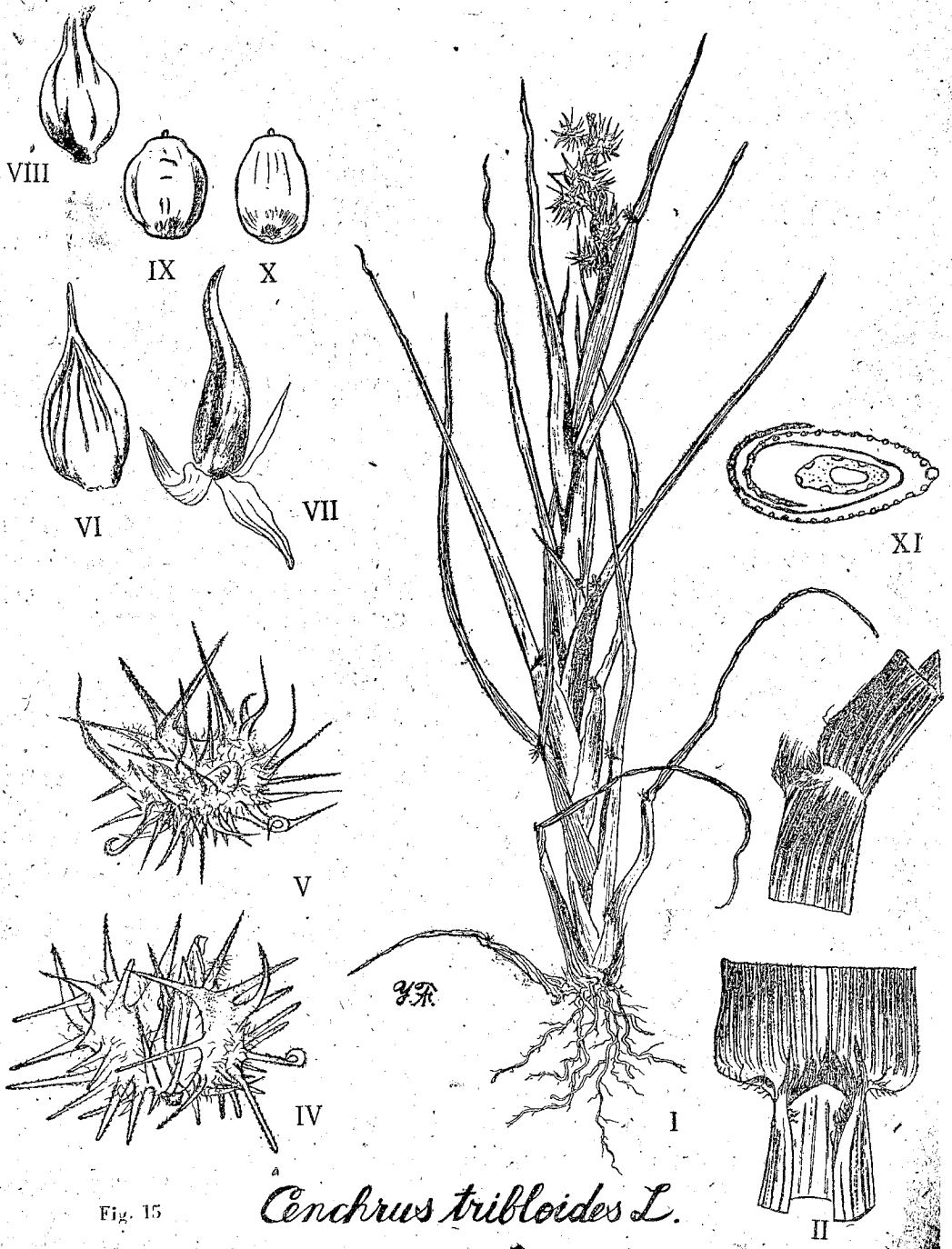
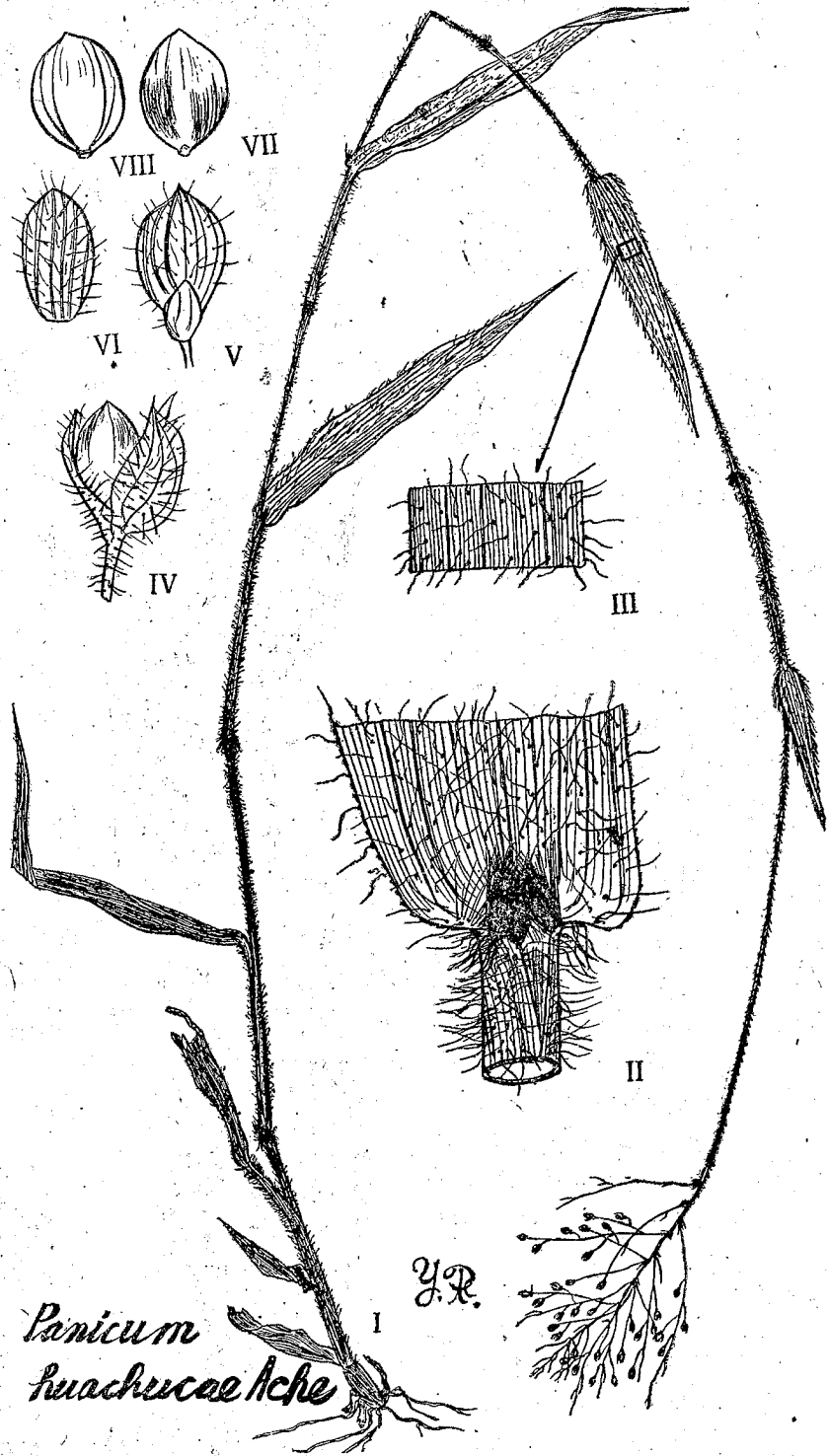


Fig. 15

Cenchrus tribloides L.



Panicum huachucae Ache

Fig. 18

ヒナガサ *Coelachne japonicum* Hachel Fig. 17

地上に匍匐した生ずる1年生草本。高さ[5cm内外、
色帯は認めず、葉基を欠く、小舌は革質にして0.3mm、

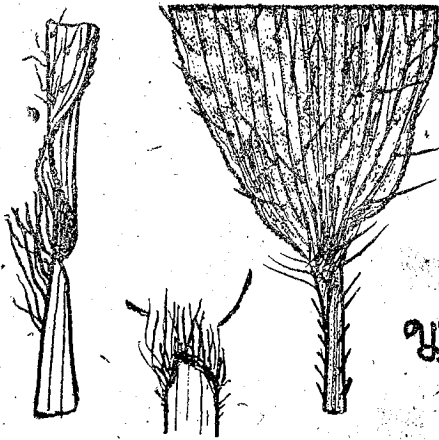


Fig. 17

舌上に1~2mmの軟毛を生ず。葉鞘は開き縁辺部は小舌に続き革質、軟毛を疎生す。葉身は顯著にして中肋の左右に太き脈3脈、その脈間に細き脈3脈を有す。表裏共に脈上有短長軟毛を疎生し、全体に纖毛を密布す。長さ2~3cm、幅0.8~1cm、長楕円形、一見粗澁、地上に接する節より不定根を生ずる。(撰津妙法寺産)

ニコゲヌカキビ *Panicum huachucae* Asche Fig. 18

1年生草本で高さ30~60cm、全草紫色を帯し(下部程甚し)軟毛を密布、穂は3~5m、枝に毛あり、特に分枝点に束生す。小穂は1.5~2mm、倒卵形、有毛、1花のみ發育する。色帯は不明瞭、葉基なし、小舌は2~3mmの長軟毛となり密生す。葉鞘は開き有短軟毛を密布す、葉身は幅5~8mm、長さ3~7cm、漸尖、表裏共有短軟毛を密布、節に散開性軟毛を具う。

本種は北米中央部以東に多い植物で久内清孝氏により昭和15年に北海道神津牧場で採集された標本につき和名をつけられたものである。筆者は1951年撰津國六甲山の有馬よりの場所で桑島正二氏の採集された標本を室井紳氏がゆづり受けられ、それを又筆者がゆづり受けた。その後1952年7月20日に筆者は矢張り六甲山の有馬よりの所で本品を採集することが出来た。

(撰津國六甲山産)

シマグサヨシ *Phalaris arunninacea* L. var. *picta* L.

Fig. 19

淡綠色白斑条入りの多年生草本。色帯は無毛、顯著にして背部で狭くなり、葉基を欠く、小舌は薄膜質で

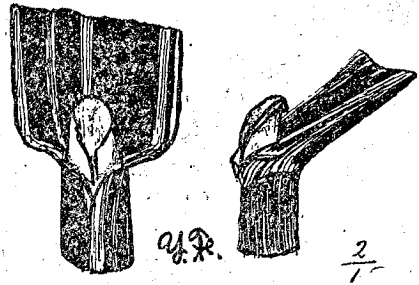


Fig. 19

鋭型、3mm、先端部は後になる。葉鞘は開き縁辺部は硝子状膜質、葉身は18~25cm、幅は1.0~1.5cm中程より先下垂する。(撰津國妙法寺産)

ヨシ *Phragmites harbs* Trinius Fig. 20

水辺に生ずる多年生草本で高さ1~2m、葉基なく色帯は明瞭、背部で狭くなる。小舌は革質截形、縁辺に

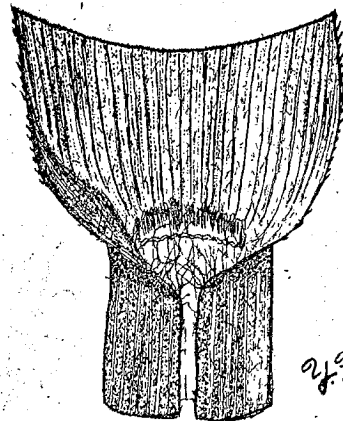


Fig. 20

は細毛を密生す。1mm、葉基部には長軟毛を疎生、葉鞘は開き、縁辺部に纖毛を生ず、葉身は25~35cm、幅8~15cm、脈間に纖毛を多数生ず、節は帯紅紫色。(撰津國妙法寺産)

スズメノカタビラ *Poa annua* L. Fig. 21

2年生草本、葉は芽を抱く、色帯は無毛にして顯著、背部にて切れる。葉基なし、小舌は薄膜質、鋭型、全

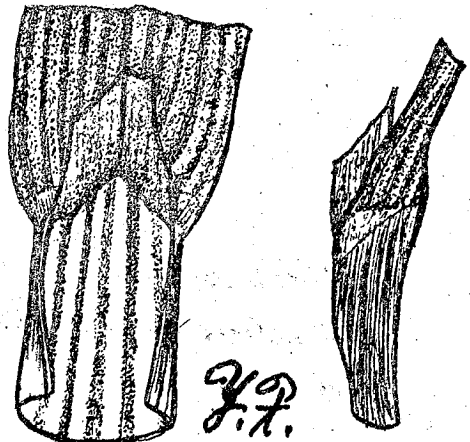


Fig. 21

(以下140頁へ)

ことも分つたので今後もこの菊の分布は海岸線に沿つて西と北に延びる可能性をもっている。分布の限界の外である三国東尋坊や青谷岬にこの菊を移植しても正常に生育するものと思われる。

本研究は文部省科学研究交付金によつてなされたものであり、広島大学理学部下斗米直昌教授の指導により行つたものである。ここに感射の意を表す。

参考文献

下斗米直昌 1935: 本邦産菊属野生種の分布に就て, 植物及動物 3

下斗米直昌 1935: , 菊の生態と細胞遺伝

KITAMURA, S. 1940: Compositae Japonicae II,

藤原悠紀雄 1942: 薩摩半島に於ける野生菊の分布

に就て, 植物及動物 10

下斗米直昌 1947: 植物の分布と倍数性, 農学綜報 1.

Resume

Chrysanthemum Makinoi var. *wakasaense* (waka-sahamagiku), a natural tetraploid, is thought to be derived from *Ch. Makinoi* (ryunogiku). The distribution of this plant extends from Iwado near Tottori as far north as Mino near Fukui. All through the distribution area the plant can be found only on the slope or the cliff directly facing Japan Sea. The northern coasts of Hyogo-prefecture are all covered with this *Chrysanthemum*. In Hamasaka and Nishihama the plant grows most abundantly.

(184頁より紙く)

縁、1.5~2.5mm, 稀に 3mm, 葉鞘は扁圧された円型、無毛、葉身は 3~6 m, 幅 3~5mm, 線形。

(撰津妙法寺産)

マコモ *Zizania latifolia nuojaraninow* Fig. 22

高さ 1.5~2m の挺水性多年草本、葉は芽を抱く、色

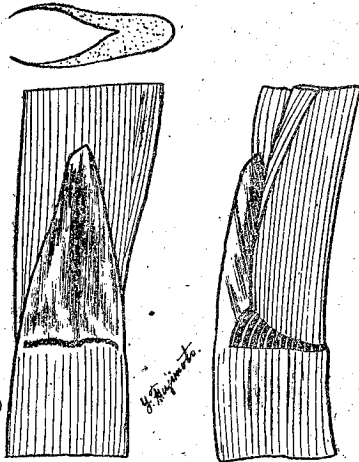


Fig. 22

帯は凹み紫彩を呈し背部にて狭くなる。葉基を欠く、小舌は 2cm, 革質にして鋭尖形なるも先端は円味を帯ぶ。葉脈に平行せる脈あり、葉鞘は小舌に続き開く、葉身と共に脈上に繊毛を疎生し、断面は V 型、中肋太く肉質部多し、葉身は幅 1~1.5cm, 長さ 50~80cm, 漸尖、中程より先下垂す。節は帯紫色水中の節より不定根を生ず。(撰津妙法寺産)

参考及び引用文献

前掲の文献の他に次のものを参考にした

久内清孝; 帰化植物、1950 (東京)

“ ; 採掘餘録 (其八) 植、研、XVI p. 1940 (1940) 東京

(144頁より続く)

参考文献 (貝類関係を除く) (1)大正11年、矢倉、介類叢話 p. 48 (2) 1923, 横山, Jap. Jour. Geogr. II. No. 2 (3) 1931. 大塚、岩波講座第4紀 p. 39. 1936' 鹿間、地質雑、XL III. 1936, 上治、地球、XXV. 1933, 大放御門、地球 XX. (4) 1937, 上治、地学雑、XLIX 9-584 (5) 1940? 森本、明石、中学校博物同好会 (6) 1951, 福田、安藤、地質雑、L VII-672

百舌欄

奈良の北郊佐保川のほとりに自然研究に最適の場所としての沼沢があつた。そこへ常に二人づれの青年教師がきて何ものかの研究をつとけている。天気が続いて沼沢の水も大そう減つた或る日、例の二人のコンビは減水の水たまりに素足になつてはいりこみ、時計を見たり尺をあてたりして、横目もふらず写生を始めた。みればトンボの羽化を研究し記録しているのである。凡そ1時間たつて一応観察がすみ、二人はやをら

腰をあげて素足を水からあげたとき驚くべし水に浸つた金皮膚に一面にひるが食ひ下つて、みのを煮た如くになつている。岸に身を寄せた二人は数十四のひるを一匹づゝひふから離しとつているが、両足には鮮血りんりとして、したゝつている。実に悲愴極まるシーン。此の一人は私、(当時30歳)一人は神戸伊三郎氏であつた。(大浦茂樹)